

伊豆大島三原山噴火歴史

臨時委員理學博士 中 村 清 二

伊豆國大島ノ三原火山ハ古來有名ノ活火山ニシテ其活動ハ既ニ有史以前ニ於テ猛烈ナリシ事ハ同島野増村ノ南方字瀧ノ口ノ海岸絶壁ニ於テ厚キ鎔岩層ノ下ニアル赤色鑛鏹狀ノ灰層中ニ於テ石器時代人類ノ遺跡ヲ有スルニヨリテモ之ヲ察シ得ベシ。左ニ本火山ニ關スル文書及ビ噴火史料ヲ掲ゲテ後ノ參考ニ供セント欲ス。

第一章 大島ニ關スル書籍著述等

大島ニ關スル著書ハ其數多カラズ特ニ三原火山ニ關スル者甚少ナシ左ニ此等ニ關係セル書籍ヲ掲ゲン。

(一) 伊豆七島志 寫本ニシテ其内容ハ二部分ヨリ成ル。

前半ハ八丈筆記ト題シ寛政九年⁽¹⁷⁹⁷⁾古川辰ノ著ハス所ニシテ寛政八年⁽¹⁷⁹⁶⁾代官三河口太忠ガ伊豆七島ヲ巡迴セシ事ヲ同人ヨリ親シク聞取リ記載シタルモノナリ。八丈筆記ハ又單行本トシテ傳ハレルモノアリ。本書中ニハ大島ノ記事ナシ。伊豆七島志ノ後半ハ別ニ題名ナケレドモ享保九年⁽¹⁷²⁴⁾ニ大島ニ渡航シ同島ヲ一週シタル記事ナリ。

何人ガ渡航シ何人ガ之ヲ記述セルモノカハ不明ナレドモ享保八年ニ日野小左衛門ガ新タニ代官トナリシヨリ考フレバ蓋シ同氏ガ新任巡迴ノ記事ナルベシ。

(二) 伊豆日記 又ハ伊豆七島日記 又ハ七島日記

ト云フ書アリ版本ナリ。龜田鵬齋の序文に寛政丙辰歲(即チ寛政八年¹⁷⁹⁶ノコト)官命豆州縣令某君巡視伊豆諸島ハ問風俗訪疾苦云々トアルヲ見レハ此ハ八丈筆記ニアル代官三河口太忠ノ巡迴日記ナルコト明ナリ而シテ三河口太忠ハ寛政七年ニ新任セラレシ人ナレバ此日記ハ氏ノ初度ノ巡迴日記ナリ此書ニ據レバ大島ハ逆風ノ爲ニ船ヲ寄セ能ハザリシニ由リ其記事ナキナリ。又巡迴日記ト題スル殆ンド同文ノ寫本アリテ美事ナル挿圖多シ前書ノ原本ニヤ。又此時ニ同行セル田百朋ノ著ハセル寛政九年ニ成リシ廻島雜話ト云フモノアリト。

(三) 大島山火記 安永六年及ビ七年ノ三原山噴火ニ關スル公文書ヲ集メタルモノナリ。元ハ水戸彰考館藏本ニシテ其全文ハ收メテ本會報告第四十六號(甲)大日本地震史料第三六七頁ヨリ第三七六頁ニアリ。凡テノ文書ニ江川太郎左衛門ノ名アリ又戊年トアリ。江川氏ハ明和五年⁽¹⁷⁶⁸⁾ヨリ寛政七年⁽¹⁷⁹⁵⁾マデ代官タリシ人ニシテ戊年トハ安永

七年⁽¹⁷⁷⁸⁾ヲ指スコト明白ナリ。

(四) 譯安永中大島山山火縣令江川上書等本末。

上記ノモノヲ漢文ニ譯セシモノ、如シ。愛知縣廳藏本ナリトシテ地學雜誌第十一集第二百二十一卷第二百二十二卷第二百二十三卷所載ノ地災輯覽第五卷ニアリ。

(五) 伊豆海島風土記 佐藤行信吉川秀道撰天明二年成

⁽¹⁷⁸²⁾伊豆七島ノ記事ニシテ動植產物ノ彩色圖數十アリ同人ノ著ニ七島巡見記アリト云フ。

(六) 伊豆海島志 一名南方海島志寛政三年⁽¹⁷⁹¹⁾伊豆ノ

人秋山章ノ著ハス所ナリ其文中ニ前記伊豆七島志ノ後半ナル記行中ニアル者ト全ク同文ノ所アリ彼書ハ蓋シ其材料ノ一部ヲ此書ニ取リシ者ナルベシ。

(七) 豆州島々書付、八丈島青ヶ島年代記 合本ナリ

前半ハ貞享四年附ノ諸島ノ統計の一文書ニシテ後者ハ著作及年代不明ナレド寛政三年⁽¹⁷⁹¹⁾ヲ以テ終ルヲ見レバ其頃ノモノナルベシ。大島ニ關スル記事ハ前者ニアリテ僅カニ半枚ノミ。

(八) 伊豆國七島明細記 公文書ヲ集メタルモノニシテ伊

豆代官所ニ於テ記シタルモノナルベシ文書中ノ日附ノ最後ノモノガ皆文化十二年⁽¹⁸¹⁵⁾ヲ以テ終ル所ヲ見レバ蓋シ

此年ノ集録ナルベシ。

(九) 伊豆七島志髓 文政十年⁽¹⁸²⁷⁾中里伸舒著ハス秋山氏

ノ伊豆海島志ニ倣ヒ其足ラザルヲ補ヘルモノナリ。

(十) 南汎錄(小四海堂叢書卷二) 羽倉用九ガ天保九年⁽¹⁸³⁸⁾

ニ伊豆諸島ヲ巡廻セシ漢文ノ紀行。

(十一) Die Vulkaninsel Oshima und ihre jüngste Eruption.

明治九年⁽¹⁸⁷⁶⁾十二月ヨリ翌十年二月ニ涉ル三原山噴火ノ

記事ニシテO. E. Naumannノ著ハス所載セテ Zeitschrift der deutschen geologischen Gesellschaft, 1877. ニアリ。

(十二) 大島火山記 前記ナウマンノ論文ヲ和田維四郎氏

ノ譯セシモノナレドモ所々異ナリタル記事アリ學藝志林第一卷第一冊明治十年印行ニ載ス。

(十三) A visit to the volcano of Oshima 前記ノ噴火ニ

ナウマント同行セシT. Milneノ記事ニシテ載セテGeological Magazine, D.C. II Vol. I. No.5 ニアリ而シテ之ト同文ノモノ次記ノ論文中ニアリテ其一節ヲ成ス。

(十四) The volcanoes of Japan. Transactions of the Seismological Society of Japan. Vol. IX Part II.

(十五) 伊豆諸島巡廻報告 明治十六年⁽¹⁸⁸³⁾福羽逸人民

ガ内務省ノ命ヲ受ケテ諸島ヲ巡廻セシ報告ナリ。

(十六) 豆南諸島ノ風土 海軍少佐矢部眞功氏ノ文ニシ

テ大島ノミノ事ヲ記セシモノナリ。地學雜誌第一集第十卷第十一卷(明治二十二年發行)ニアリ。

(十七) 伊豆島巡視日録 竹中邦香著明治二十年(1877)ニ

諸島ヲ巡廻セシ紀行ナリ。

(十八) 大島火山調査報文 明治二十八年(1895)十二月ヨ

リ翌年一月マデ同島ヲ踏査セシ理學士山崎直方氏ノ報告ニシテ載セテ本會報告第九號(明治二十九年發行)ニ在リ。

(十九) 伊豆國大島鎔岩流下ノ人類遺跡 地質學雜

誌第八卷第九十九號明治三十四年發行ニ載ス。理學士大築洋之助氏が大島野増村ノ南方海岸絶壁ニアル地層中ヨリ出ヅル石器時代ノ遺跡ニ就テ調査セシモノナリ。

(二十) 伊豆大島鎔岩流下ノ石器時代遺跡 地學雜

誌第百五十九卷第百六十卷(明治三十五年發行)ニ載ス。理學士大築洋之助氏ト同行セシ鳥居龍藏氏ガ地學協會ニ於テ爲セシ講演ナリ。

(廿一) 伊豆大島ニ於ケル觀察雜俎 地學雜誌第百六

十一卷第百六十二卷(明治三十五年(1902)發行)ニ載ス。理學士佐藤傳藏及ビ理學士福地信世氏ノ合著ナリ。

(廿二) 伊豆七島圖會 明治三十五年(1902)發行風俗畫報第

二百五十四號ナリ。

(廿三) 明治三十八年六月上旬ニ起リタル伊豆大

島ノ地震ニ關スル地質學上ノ觀察 本會報告

第五十三號ニ在リ理學士福地信世氏ノ報告書ナリ。

尙此他ニ大島誌、大島古記、大島明細記等ノ書アルガ如シト雖モ予輩ハ之ヲ閱讀スルコトヲ得ズ。上記ノ書籍論文中科學的價值アルモノハ僅カニ(三十一)(三十二)(三十三)(三十八)(三十九)等ニシテ三原火山ノ歴史ヲ明ニスルハ極メテ困難ナリトス。

第二章 大島ノ地形

伊豆國大島ハ伊豆半島及ビ房總半島ノ中間ニアリテ相模灣ノ入口ニアリ其形楕圓ニシテ其ノ長軸ハ北西北ヨリ南東南ニ走リ其兩端ハ尖端ヲ成ス即チ北方ノ尖端ハ乳ヶ崎^{サキ}ニシテ南方ノ尖端波浮^{ハフ}港口ノトウシキ崎ニ至ル長サ十五料アリ。横軸ノ長サハ八、五料ナリ。三原山ハ島ノ中央ニアル活火山ニシテ全島ノ地形ハ此山ヲ中心トシテ四方ニ傾斜ス。三原山ハ中央火口丘ト外輪山トヨリ成リ兩者ノ間ニアル火口原ハ荒漠ナル砂原ナリ土人之ヲ砂漠ト名ヅク。中央火口丘上ニ殆ンド圓形ノ一大火口アリ土人之ヲ御神火ト唱フ其直徑七百米アリ。火口丘ノ最高點ハ海拔七百五十五米ニシテ火口原ヨリ高キコト約二

百米ナリ。外輪山ノ火口壁ハ殆ンド全ク其北東側ヲ缺損スルヲ以テ恰モ蹄鐵狀ヲ爲シ尙其西南側ニモ一小缺損アリテ其形不整ナレドモ全體トシテハ直徑約三籽ノ圓形ナリ。外輪山ノ最高點ハ三原白石ト云ヒテ海拔七百三十六米ナリ。

三原山ノ周圍ニハ數多ノ死、側火山アリ。島ノ北側ニアルハ愛宕山(又ハ地ノ岡山)三ツ峯等ニシテ南側ニアルハ二子山、岳ノ平山等ナリ。岳ノ平山ニハ完全ナル火口アリ。波浮港モ亦一ノ爆裂火口ニシテ其近傍ニアル字ヒクボモ亦同一種ノ者ナルベシ。

全島ノ地形ハ三原山ヲ中心トシテ四方ニ傾斜スルコト前既ニ説ク所ノ如シ。而シテ島ノ東側ハ地形複雑ニシテ不毛ノ地多ク海岸モ亦嶮惡ナル絕壁多シ是レ古來此方面ニ向テ盛ニ鎔岩流ヲ出セシニ由ルナリ。島ノ西側及ビ北側ハ傾斜稍、緩徐ニシテ元村(新島村)ノ北方ニハ天神原、北野原等ノ平地アリ。海岸ハ全島概シテ岩壁ニシテ砂濱ヲ見ルハ僅カニ元村ノ南方湯ノ濱ト間伏村ノ北方サノ濱トアルノミ。海岸線ノ出入モ亦極メテ少ナク波浮港ノ他ニ安全ナル錨地ナシ。

第三章 三原火山噴火ノ歴史

三原火山噴火ノ歴史ハ其詳細ヲ知ルニ由ナシ今前章ニ掲ゲタ

ル諸書及ビ我歴史上ニ記載セラレタル零碎ノ記事ニヨリテ三原火山噴出ノ年代ヲ求メントス。但シナウマンノ論文(十一)ハ明治九年十年ノ噴出ノ有様ヲ知ルニハ甚重要ナル者ナレドモ其中ニアル三原山ノ年代記ハ誤算アリテ(十二)ノ譯文ト一致セズ故ニ茲ニ之ヲ採ラズ。

歴史上ニ現ハレタル記事(以下原本ニ就テ檢セザリシモノニハ*ヲ附シテ區別ス)ノ第一ハ

日本紀 天武天皇十三甲申年(684)壬辰(十月十四日)逮于人

定大地震舉國男女叫唱不知東西則山崩河湧諸國郡舍及百姓倉屋寺塔神社破壞之類不可勝數因是人民及六畜多死傷之時伊豫湯泉沒而不出土佐國田苑五十餘萬頃沒爲海古老曰若是地動未曾有也是夕有鳴聲如鼓聞于東方有人曰伊豆島西北二面自然增益三百餘丈更爲一島則如鼓音者神造是島響也

ニシテ伊豆海島志ニ此文ヲ引キテ附記シテ曰ク「按ズルニ今ノ新島村ノ地卽是時增益セルナリ故曰新島、コノ村島ノ西北ニアリ」大島火山記ニハ「今ノ新島村ノ地ハ當時之ガ爲ニ海面ニ噴起セラレテ一小島トナリ後チ遂ニ該島ニ連接セルモノナルナラン」ト説ケリ。新島村ト云ヒ野増村ト云ヒ共ニ噴出ノ爲ニ陸地ノ増大セシヲ意味スガ如シト雖モ其果シテ此時ニ於テセシカハ今日ヨリ之ヲ知ルヲ得ズ。然レドモ日本紀ニ載セラ

レタル噴出ハ激烈ノモノナリシコトハ疑フベカラザルコトニシテ土佐國ヨリ畿内伊豆ニカケテ此日ニ大變動アリシナリ。次ニ歴史ニ顯ハル、記事ニテ大島ノ噴火ナラント思ル、ハ

續日本後記 承和五年(838)秋七月癸酉有物如粉從天散零

逢雨不銷或降或止

同書 同年九月甲申從七月至今月河内參河遠江駿河

伊豆甲斐武藏上總美濃飛驒信濃越前加賀越中播磨紀伊等

十六國一々相續言有物如灰從天而雨累日不止但雖似恠異

無有損害今茲畿内道俱是豐稔五穀價賤老農名此物米華云

ノ記事ナリ。小鹿島氏著日本災異志ニハ之ヲ以テ大島ノ噴火

ト判定セリ。蓋シ氏ノ出所ハ此所ニ記ス續日本後記ノ文ニシ

テ同書ニハ

日本災異志 承和五年七月五日 伊豆大島山噴火雨灰 續

日本後記

トアリ如何ナル理由ニテ之ヲ大島トセシカ不明ナレドモ予輩モ亦此記事ハ大島ニ關スルナラント思考ス。其ハ駿河信濃等ニテモ灰ノ如キモノヲ降ラセシ事ヲ云ヒテ富士山、淺間山ノ噴火ヲ云ハザレバ富士淺間ノ噴火ニハ非ズ。而シテ上記十六國ノ近クニテ此ノ如キ大噴火アルベキ山ハ大島ノ外ニナカルベケレバナリ。大島ノ噴火ノ灰ガ越前播磨等迄モ及ビシハ餘

リ遠キガ如シト雖モ決シテ然ラズ。例ヘバ大隅國櫻島ノ安永八年九月廿九日ノ噴火ノ灰ハ十月二日三日比ニ土佐、紀伊、伊勢、尾張ヨリ江戸ニ迄擴ガリテ降リシコトハ多クノ記事ニヨリテ明ナレバナリ。

次ニ歴史ニ顯ハル、記事ハ

三代實錄 卷第四十九 仁和二年(886)五月二十六日甲辰降

雨天東南有聲如雷

同書 仁和二年八月四日庚戌勅令安房上總等國重警不虞、

先是安房國言上去五月二十四日夕、有黑雲自南海群起其

中現電光雷鳴地震通夜不止二十六日曉雷電風雨已時天

色清朗、砂石粉土遍滿地上山野田園無所不降或所厚二三

寸或處僅蔽地稼苗草木皆悉凋枯、馬牛食黏粉草死斃甚多

陰陽寮占云鬼氣御靈忿怒成祟彼國可慎疫癘之患又國東南

將有兵賊之亂是預令戒嚴

即チ五月二十六日ニ安房國ニハ砂石粉土ヲ雨ラシ京師ニテ雷ノ如キ聲ヲ聞キタル變事アリシナリ。然ルニ左ノ記事ニヨレバ新タニ生ジタル島ノ圖ヲ其翌年伊豆國ヨリ京師ニ奉リシナレバ此變事ハ即チ此新生島ノ事ナルコト疑ナシ果シテ新タニ島ガ噴起セシカ又ハ既ニアル島ノ一部ニ大噴出アリシカハ不明ナリ。曰ク

日本記畧 宇多天皇仁和三年十一月二日辛未伊豆國獻新生

島圖一張見其畫中神明放火以潮所燒則如銀岳

扶桑畧記 仁和三年十一月二日伊豆國獻新生島圖一張見

其畫中神明放火以潮所燒則如銀岳其頂有綠雲之氣細事在圖中不更記之

伊豆大島ハ安房ノ西方ニ當レバ此新生島ハ蓋シ大島ニ非ザルベシ。三宅島カ新島カ或又南方ノ島カ不明ナリ姑ク記シテ疑ヲ存ス。新島ノ一半ヲ成ス向山ガ此所ニ云フ銀岳ニ非ズヤトモ思ハル。新島ノ口碑ニ向山ハ今ヨリ大約八百年前ニ噴火セリト云フ。

次ニ中臣宗忠朝臣ノ日記ナル中右記ニアル左ノ記事ハ伊豆ノ海上ニ起リシ或大變事ニシテ京師ニ於テモ大恐慌ヲ來セシモノ、如シ。然レドモ惜哉伊豆ハ東海ノ僻地ニシテ其變狀ノ詳細ハ京師ニ傳聞セラレザル故今之ヲ知ルニ由ナシ或ハ伊豆大島ニ起リシ噴火ニアラザリシカ。

中右記 天永三年⁽¹¹¹²⁾十月二十二日 從一昨日東方有鳴動

聲其響如打大鼓衆人驚奇不知何所

二十三日^{丁未}天晴巳時許大鳴動世間驚恐極是何徵哉

二十四日 早旦從院後白河法皇ナルベシ有召則參入雖御

物忌參殿上攝政殿被參給大藏卿參入以長實朝臣被仰云從去二十日有鳴動音于今不止甚所懼思食也何樣可被沙汰事哉且又問大外記師遠天文博士宗明等可量申者大藏卿問師遠宗明書宿紙奏覽大略如密奏天之有聲之由所申也下人說云駿河國富士山并信濃國朝間峯燒落之時其聲振動遠聞天下若是如此事歟云云仍被尋之處從尾張國上道下人云從彼國猶當東方有此聲者彌有其疑予申云猶其國其山鳴動之由被尋天以鳴初時可被行御卜歟其後御祈等早可被行也二十九日 又或人來談云此日者當東方夜晝有鳴動聲不知何所之間從坂東國上洛下人云駿河國富士山動也又火炎高昇近隣國々騷動云云但未進國解之間不知實說也

十一月一日 亥時許地震

十一月二日 天晴巳時許大有鳴動聲如我頭響大略天之所爲歟非東國山聲歟甚不得心事也

十一月十日 大藏卿於院殿上談云近日天下鳴動事非富士朝間山燒是天鼓之由天文博士所申也尤恐又奇雲橫天流星照雲之怪異夜々數度如此事旁有御祈可宜歟

十一月二十七日 入夜即參內是依可行軒廊御卜也、先於陣^{アキ}腋問諸司參否申皆參之由仍著端座令敷膝突召頭辦可仰可^{ヒザツキ}

敷座之由、諸司敷座居水火了、召外記仰云神祇官陰陽寮
召外記稱唯出了、神祇官祐公長兼俊陰陽寮頭光平助家榮^ス
家憲入從中門著座予召公長朝臣^{五位}下伊豆國解云吉凶
可卜申復座、後又予召陰陽頭朝臣^{從四位}仰云伊豆國司申海
上神火事吉凶可占申者稱唯復坐共占卜、神祇官將來卜形^{モテヤナリ}
披見之處非有公家御藥者天下疾苦口舌者、又寮御占形披
見理運之上公家御慎者、重問輕重強非重之由官寮共所申^{カサネテ}
也、召外記莒入本解占形等、付頭辦、奏聞今日院御物忌也、籠^{ヤドニ}
宿明日可奏之由所被申也、仍召外記官寮可罷出之由仰官
寮退出諸司撤坐之後退出

伊豆國解云去十月中下旬之比海上火出來鳴動如雷者是
去月天下鳴動聲大略此響歟希有奇怪第一之事也

*
分類年代記 應永十八年⁽¹⁴¹¹⁾四月四日、伊豆大島燒、其響
如雷、海水如湯、水蟲多死

野史 應永二十三年⁽¹⁴¹⁶⁾八月二日伊豆大島發火響如雷
鎌倉大日記 應永二十八年⁽¹⁴²¹⁾四月四日、伊豆大島燒、其
響如雷、海水如熱湯、魚多死

此三ツノ中第一、第三ハ蓋シ同一ノ事件ニシテ前者ガ應永十
八年トスルハ恐ラク二ノ字ヲ脱セシナルベシ。次ニハ

伊豆七島明細記 官庫ニ山燒ノ事ヲ記ス反古有依之左ニ

寫置クト云フ條ニ島々燒申候覺トシテ

一當子年ヨリ八十四五年以前燒申候由 大島

是ハ慶長五子同六丑年但三月燒出シ申候由

一同年ヨリ七十二三年以前燒申候由 同所

是ハ慶長十七子十八丑年但春ノ内燒申候由

一同年ヨリ四十八九年以前燒申候由 同所

是ハ寬永十三子同十四丑年但冬ヨリ明ル春迄六七ヶ月

モ燒申候由

トアリ即チ慶長五、六年^(1600 1601)頃同十七、十八年^(1612 1613)頃及ビ

寬永十三、十四年^(1636 1637)頃ニ小噴火アリシモノ、如シ

次ニハ天和四年即チ貞享元年⁽¹⁶⁸⁴⁾ニ大噴火アリテ元祿三年

⁽¹⁶⁹⁰⁾マデ七ケ年ニ涉リ噴烟セリ此時三原山ノ火口即チ御洞ヲ

現出シ鎔岩ハ流レテ海邊ニ至リテ字新築出ト稱スル地ヲ増シ

タリ此噴火ニ關スル記事左ノ如シ

分類年代記 貞享元年三月伊豆大島燒踰月不正

甘露叢 貞享元年三月十日伊豆國大島山自先月十六日至同

二十七日燒事夥、土石崩、悉入海中、乍屢焦俄爲長八十餘町之

山、燃崩聲如雷、彼島之民家震動、器財破壞

近世東西略史 貞享元年二月十六日ヨリ伊豆國大島燒、其

響大雷ノ如シ山中ヨリ峯ニ燒上リ燒砂海中ニ押流シテ山ニ

成レリ二十一日ニ至ツテ漸ク燒止

常憲院殿御實記 貞享元年二月ノ部ノ終ニ此月十六日

ヨリ二十七日マデ伊豆大島ノ山燒シガソノ焦土海ニ流出デ
水面七八町ホド山ノ如ク成レリ此響ニヨリ島中民家ノ器財
悉ク壞損セシ由注進アリ

慶安元祿間記 貞享元年三月八日豆州大島ノ山去月十六

日ヨリ燒出同二十七日迄火留リ不申、燒候様子ハ山中ヨリ
峯ヘヤケ上リ蠟ノ如ク海ヘ燒流レ燒土カタマリ候所長サ七
八十町程山ニ成リ横ハ四五町又ハ二三町有之由右燒崩候響
ニテ大島ノ在家鍋釜ナド破レ申候由御代官ヨリ。

大島山火記 本書記載文書中(後ニ重出ス)ノ一節ニ左ノ文

アリ

天和四年子二月十六日

一三原山御洞燒出跡此度(安永六年ノコト)燒出口 壹ヶ所

天和四年子三月八日

一三原山御洞ヨリ壹里程下寅ノ方字

小釜瀧下ヨリ海邊燒出跡當時字

壹ヶ所

新築出ト申傳候

伊豆七島明細記 官庫ニ山燒ノ事ヲ記ス反古有依之左ニ

寫置クトシテ次ノ二文書アリ兩者ヲ比較シテ前者ハ貞享元

年七月ノモノ後者ハ同八月ノモノナルコトヲ知ル

大島山燒書上ノ覺

一大島山燒場今月十八日迄ハ煙斗立別條無御座靜候様ニ相
見ヘ申候所十九日ヨリ山燒強ク罷在二十日ニハ少々砂降
申候由二十一日ニハ砂降不申火ノアリ斗リ相見エ廿二日
廿三日廿(一字缺)日ハ當夏ノ如ク山々(缺字アリ)多降候ヘ
ドモ大島ノ村々ヘハ砂降不申候由昨晚大島ヨリ御注進
(缺字アリ)旨書付ヲ以テ如此申上候以上

貞享元年(缺字)月二十九(缺字)

竹内三郎兵衛儀御代官所ニ

(缺字)候故拙者印形仕上候

鳥塚平兵衛 印

御勘定所

又一ツハ

大島山燒申候注進之覺

一大島山七月六日七日ヨリ跡々ノ通燒烟深ク少々砂降八月
九日火煙共ニ強ク山鳴音夥數十日ヨリ十八日迄煙斗リニ
テ十九日ハ山鳴音強御座候
一二十日ヨリ八月朔日迄煙斗少立申候只今ノ體ニ御座候ハ
ゞ次第ニ靜マリ可申様ニ相見ヘ申候

一大島五ヶ村共ニ砂降積、山中ハ三四尺餘村居ノ方ハ貳尺壹尺四五寸又ハ八九寸砂積申候依之作毛一圓無御座候辛ナド掘出シ見申候處朽リ申候島中困窮仕及飢申體ニ御座候木立痛所々枯木枝葉折落申候

(二ヶ條略)

右ノ通り昨六日曉大島ヨリ申來候以上

子八月七日

伊豆海島志 貞享甲子二月十六日三原山自燃ル凡七年而

已

續日本王代一覽 貞享元年二月十六日大島三原山噴火其響如大雷所燒之砂石海ニ入リテ山ヲ成ス噴火凡七年ニシテ熄ム

伊豆七島明細記 大島山燒之儀天和子年二月十六日ノ夜

ヨリ燒出元祿午年迄七ヶ年ニ段々燒靜リ申候右燒止何月時分燒止リ候哉ト古キ者共ニ相尋ネ候得共何レモ覺不申由ニ御座候(下略)

伊豆七島志 三原山、此山ハ島中第一ノ高山ニシテ昔ハ大

木生茂リシヲ四十年前以前(享保九年ノ記事ナレバ即チ貞享元年ノコトナリ)山燒シ絶頂ヨリ燒シ事七年ノ間ナリ其時大木トモ悉ク枯失シタル由ナリ未ダ麓ニ殘リシ立枯ノ木共

アリ草木生セズ云々

大島山火記 右三原山ハ大島ノ真中ニ有之天和四子年ヨ

リ元祿三年年迄七ヶ年ノ間山燒候節山上ニ凡拾町四方程ノ洞穴出來今以其儘有之深サ何程可有之哉難斗御座候云々

上記貞享元年⁽¹⁶⁸⁴⁾ヨリ七ヶ年繼續セシ噴出ニ次クモノハ安

永六年⁽¹⁷⁷⁷⁾七月同七年⁽¹⁷⁷⁸⁾三月、九月、十一月ノ噴出ニシテ野

増及ビ泉津ノ兩方面ニ向テ鎔岩ヲ流出シテ海ニ至レルモノア

リ蓋シ大島火山ハ成層火山ニシテ其噴出ノ度數多ク鎔岩ノ上ニ更ニ鎔岩ヲ流セシコト勿論ナリト雖モ今日見ル處ノ外輪山

舊火口壁ノ西南野増ニ向フ所ト東北泉津ニ向フ所トニ大缺損アリテ海邊ニ至ルマデ廣漠タル鎔岩原アルハ蓋シ此時ニ生ゼシモノナルベシ

續日本王代一覽 安永六年是年豆州大島燒ル

近世東西略史 安永六年是年伊豆大島燒

後見草 (安永七年十二月ノ條) 是月伊豆大島噴火ス

武江年表 安永六年夏ヨリ伊豆大島燒始メ南海ヘ火燃出ル

品川沖ニテ夜々火光天ニ映ズルヲ見ル

大島山火記 本書ハ此噴火ノミニ關スル公文集ナリ其全

文ハ本會報告第四十六號(甲)ニアリ故ニ今其中ヨリ重要ナルモノヲ抄録ス

一右三原山ハ大島ノ真中ニ有之天和四子年ヨリ元祿三年迄七ヶ年ノ間山燒候節山上ニ凡拾町四方程ノ洞穴出來今以其儘有之深サ何程有之哉難斗御座候賞安永六年ノコト七月二十九日暮時右洞穴ヨリ火氣吹出テ夜分ハ山上ニ火氣相見晝ハ煙斗ニテ火氣ハ相見不申候山燒強弱有之燒音夥敷折々地震仕リ髮ノ毛ヨリ細黑白長サ一寸位ヨリ二三寸位有之灰并ニ小キカナクソノ様成灰降候得共八月二十五日比迄ハ差而相替候儀モ無御座同二十七八日ハ燒音地震共相止灰モ降不申同二十九日北風ニテ雨降候得共燒強罷在九月二日ノ曉方ヨリ別テ燒強ク煙リ夥敷燒音雷ノ如クニテ地震モ度々有之同八日ヨリ九日夕方マデ大風雨ニ御座候所燒強九日暮比ヨリ雨風止候得共火勢強燒音モ彌增強同十二日朝迄ハ相替候儀無御座灰ハ降不申候燒候石砂交風ノ吹廻シニヨリ降候儀モ御座候段申上候且又晴天ニハ此節ニテモ殊ノ外暑ク極暑同様御座候段申上候

同書 私御代官所伊豆國附大島山燒之儀去酉七月二十九日ヨリ燒出強弱ハ御座候得共燒止不申候處當九月十八日同二十六日兩日別而強燒出候旨島役人共注進申越候間御届申上候處見分之者差遣候様被仰渡則手代遣シ見分爲仕候趣麤繪圖

相添左ニ申上候

天和四年子二月十六日

一三原山御洞燒出跡此度燒出口

一ヶ所

天和四年子三月八日

一三原山御洞ヨリ一里程下寅ノ方字小釜瀧下ヨリ

海邊燒出跡

一ヶ所

當時字新築出ト申傳候

安永六年酉七月二十九日

一三原山御洞燒出口

一ヶ所

安永七年戌三月二十二日

一三原山御洞ヨリ字中野澤

一ヶ所

但シ長一里程幅十間程深サ十五六間

安永七年戌九月十八日

一三原山御洞ヨリ字赤澤

一ヶ所

但シ長一里半程幅七八間深サ三十間程

安永七年戌九月二十六日

一三原山御洞ヨリ字ゴミ澤

一ヶ所

但シ長二里程幅三町程澤サ三間程

下略

同書 當戌三月二十二日三原山御洞戌亥ノ方燒崩レ夫ヨリ中

ノ澤へ焼下リ泉津村ヨリ東ノ方右村ヨリ平日百姓稼山へ參候道下ニテ焼止申候尤人家ヨリ道法凡十八九町程相隔申候且九月十八日御洞ヨリ未申ノ方焼崩夫ヨリ野増村差木地村ノ間字赤澤ト申澤へ焼下リ申候右赤澤ノ内焼止候場所迄兩村ヨリ道法一里程宛相隔申候右澤ノ裾通海端迄ノ間當時ニテハ通路相成候様罷在候間島中ニテ相互ニ助合差支無御座且又同月二十七日御洞ヨリ丑寅ノ方夫ヨリ字ゴミ澤ト申澤へ焼下リ是ハ海邊へ焼出テ磯ヨリ海へ凡長一町程横十町餘モ有之焼出高サノ儀ハ海中水上ニテ凡五六間程モ高ク相見申候此所波打際ニテ未黒煙立登申候右場所ハ大島裏山ニテ嶮岨ニ御座候間元來村居モ無御座泉津村稼山ニテ外村々へハ道筋モ無之通路不仕場所ニ御座候

同書 戊十一月即チ安永七年十一月ノ文書ニ

(上略)出島役人ヨリ注進申越候趣先達テ御届申上候所其後地中焼音追日強ク雷鳴ノ如クニテ焼立候所當月十七月夜ヨリ殊ノ外火勢強ク焼音彌増嚴敷罷成候由且又當月二十一日晝時比三原山ヨリ凡二里程隔泉津村ノ内宗字葉地釜ト申所ヨリ煙立火燃出候段右村ノ者共ヨリ島役人へ注進申出候旨云云(下略)

伊豆國七島明細記

大島山燒ノ儀安永六丁酉七月二十

九日夜三原山御洞ノ内焼出明リ相見へ申候所夜ハ明仕晝ハ煙立上リ申候時ニヨリ砂降申候而地中ノ火氣強故作物腐皆枯仕候

同書 安永七年戊三月泉津村字中野澤ト申澤へ焼出申候同年九月泉津村ノ内字ゴミ澤ト申澤へ焼出海中迄焼出申候同月野増村ノ内赤澤ト申澤へ焼出申候

同書 天明四年辰四月附ノ文書中ニ「去十一月二日(即チ天明三年¹⁷⁸³)ノコト)ヨリ同五日迄焼砂降リ糧草枯絶申候間當春ニ至リ夫食無御座云々」

同書「天明四辰年¹⁷⁸⁴九月大島山燒砂降ニ付被仰付候」天明五巳年¹⁷⁸⁵大島山燒砂降ニ付被仰付候「天明六年¹⁷⁸⁶大島山燒砂降ニ付被仰付」ト云フ文書アリテ皆救助金ヲ出サレタルコトヲ記セリ

伊豆海島風土記

此島度々山ノ燒ル事アリ今モ絶々煙立

雨夜杯ハ燃出ルユへ尋ネ行テ見ルニ三原トイヘル山ノ頂キ一町バカリ深サ七八丈程ノ洞ト成其内幾筋トナク焼割テ夫ヨリ煙吹立折々燃出ルナリ此外ゴミ澤中ノ澤赤澤トテ深キ谷ナリシガ三谷トモ焼埋リ海へモ焼出昔ノ燒跡ハ草生木立トモ成シ所アマタル故燒盛タル頃ノ様子年曆ヲモ尋ネ聞シニ詳ナル書類ナドモ見ヘザレド貞享元子年ニ焼出又天和

四子年ヨリ元祿三年迄焼タリ夫ヨリ止テアリシガ安永六
酉年焼起リ翌戌年マデハ火勢最強ク晝夜震動シテ野山ノ業
ニ怠リ又海魚不寄ユヘ漁火ノ營モ絶ヘ艱難セシヨシ。然ハ
アレド島ニテハ是ヲ御神火ト唱ヘ火口ヲバミホド、云フテ
清メ崇ルヨシ如何様ソノ頃ハサモアリツランニ今ハ何ノ障
ニモナラズ嶮岨成嶺ハ焼崩テ谷ヲ埋海ヘ焼出テハ土壤凝固
シテ陸ト成リ都テ島ノ地程廣マリシ事不少年曆立ナバ皆田
畑トモ成民土ノ増ナレバ御神火ト稱シ仰クモ理リ成ベシ

伊豆海島志

大島八丈三宅上津青島等古ヨリ皆山燃アリ
シト云フ去共記録ナケレバ其年代記シ難シ其燃熾ナル時ハ
大ニ燒ケ廣マル或ハ三五年或ハ十餘年其火ノ初メテ發スル
所後ニハ大ナル洞トナリ深サ測ルベカラズ大島三宅青島ハ
至于今燒テ又ヤム、サレドモ後ハ洞中バカリ燒ルナリ土人
コレヲミホドト云フミハ御ホハ火吾邦古ハ彥火々出見、火
垂火口ナド即チ等音ナリトハモトノ上略ニテ原ノ義ナリ
故ニ今其洞ヲ火原洞ト云フ所謂火井ナリ海東諸國記ニ豆州
ニ火井一所ヲ載ス豈此等ヲ傳聞シタルヤ凡テ山燒ハ人ハ烟
ニ咽ヒ咳嗽ヤマズ草木ハ近ハ枯死遠キハ凋傷ス山野ニ青キ
物無様ニナル一體硫黃極メテ多クシテ燒ケルナリ故ニ其氣
薰シテ然ルナリ頃年大島ノヤクル其盛成時ハ遠ヨリコレヲ

望ニ光焰照天東都豆相勢紀駿遠ノ時々震動シ灰ヲ飛ス雨夜
ナドハ火勢益甚シ大島ノ田畠灰積ル事三四尺五味澤赤澤中
澤ナド云深谷皆埋リ又海ヘモ燒出テ海濱埋リ陸地ト成所多
シ亦燒石ヲ飛シ浮石ノ如クニ成漂流海面ヲ蔽テ諸州ノ海濱
ニ流レ至ル其吹出シタル土石夥敷事ニテ大島盡ク燒崩ルモ
足ラザルベキ程成ニ其島巋然トシテ土壤廣大ト云フ寶永ノ
富士燃ルモ又然リ

八丈島大島共ニ三原山アリ三宅三附三倉又八丈ニテ野菜ヲ
入ル器ヲ(二字缺)葉藍糸ヲ入ル器ヲ續筐スベテ三ノ字ヲ用
事多シ因テ意フミハ尊尙ノ詞御ノ字成ベシ吾邦古昔神道說
教凡事無善惡無大小皆神所爲トナス猶中土上古凡ノ事皆天
ノ所爲トナス天竺ニテハ佛ノ所爲トスルガ如シ故ニ尊テミ
ノ字ヲ用キルカ島民相傳テ曰ク本島ニテ神ノ燃出燃廣マリ
玉フ故ニ火ノ原ヲミホト云燒クルヲ御神火ト云燒灰ヲ神灰
ト云テ少シモ忌惡ノ意ナシ何サマ海ヘ燃出テ砂石凝固土壤
廣マリ數十年後ハ草木モ蕃生シ昌シナレバ神ノ燒廣メ玉フ
ト云フモコトワリナレドモ指當リテハ田畠モ砂ニ埋レ作物
モミノラズ魚ヨラズシテ獵モナシ島民ノ困窮云ハカリナシ
トキコユ

同書 安永丁酉七月三原山又燃ル今ニ至ル積灰四五尺寛政壬

子⁽¹⁷⁹²⁾ 秋凡十六年而已

同書 野増村、此村近年(寛政一年頃ヲ指ス)山燒ニテ別シテ灰ヲ降スコト多ク人戸本七十九軒程アリシガ今ハ僅ノ草舎造リ土間ニ萱草等ヲ布タリ古軒バカリ殘ル誠ニ淺間敷體ナリ是等ノ記事ニ據レバ⁽¹⁷⁷⁷⁾七月二十九日夕刻ヨリ三原火口ヨリ噴火シテ火山毛即チハワイノ火山ニ於テ *Peles hair* ト稱スル者ヲモ吹出シ夫ヨリ翌年三月二十二日ニ泉津村ノ東ニ向テ中野澤ヲ沿フテ鎔岩流出シ九月十八日ニハ新島野増ノ兩村ノ間ニアル赤澤ヲ沿フテ流下シ九月二十六日ニハ再ビ泉津方面ニアルゴミ澤ニ流下シテ海ニ至リ十一月二十一日ニハ三原山麓ニアル字葉地釜ヨリ噴火セルナリ而シテ天明三、四、五六⁽¹⁷⁸³⁾⁽¹⁷⁸⁴⁾⁽¹⁷⁸⁵⁾⁽¹⁷⁸⁶⁾等比年砂ヲ降ラシテ寛政四年⁽¹⁷⁹²⁾ニ至リテ十六年ヲ經過シテ始メテ鎮靜ニ歸セシモノ、如シ其後左記ノ文書ニヨレバ享和文政弘化ノ頃長期ニ渉ル稍、緩慢ナル噴火ヲ爲シ明治三年ニ小噴火アリテ明治九年十年ノ噴火アリ此時三原火口即チ御洞ノ中ニ新ラシク火口錐ヲ噴出セルナリ

續日本王代一覽 享和三年⁽¹⁸⁰³⁾九月二十六日豆州大島山

燃ル十月二日夜三日江戸灰降ル同十八日未刻ヨリ江戸大霧
東西南北甚闇シ人面見ヘズ、同十九日又霧降ルコト煙ノ如

シ

泰平年表 享和三年十月朔日 伊豆大島山燒ル同二日江戸

灰降ル

大島明細記 本會報告第九號山崎氏ノ論文中ニ本書ヲ引

キテ曰ク文政五年⁽¹⁸²²⁾ヨリ六年七年中山燒降砂諸作不熟

南汎錄 天保九年⁽¹⁸³⁸⁾四月ニ大島ニ渡リシ紀行ノ中左ノ文

アリ多少當時ノ噴出ノ狀態ヲ察シ得ベシ噴烟ノ量可ナリ多カリシ者ノ如シ

初二日平旦、開洋十餘里海霧褰斂、始見大島、島中最高處爲三原山、硫煙雲騰、較肥之阿蘇更盛(下略)

初三日(中略)乃騎島馬上三原山(差本地村ヨリ上リシナリ)可十許里、箐盡、炎石磊磊、或作羆犀、鷄蟲之狀、不復通輪蹄、步而上、有野羊數隻追踪而來、相近凝立乍還駭走、又十數盤得少平所、小憩又上、山斗峻削、而遇罡風至厲、每硫煙下覆、伏沙過煙、手行二百餘步始抵山巔、巔有大坎、周里餘、硫煙霧出、是曰火原、坎口沙熱不可久竚、命晉吉描取梗槩乃下、每步沙石流下不能自止、瞥間達原路

次ニハ大島明細記弘化三年⁽¹⁸⁴⁶⁾ノ記事ニ

近年山燒降砂ニテ桃ノ木大方枯絶申候

トアリ次ニハ

大島火山記 (上略)今ヲ距ル四十年前(明治十年)印行ノモ

ノナレバ(1837)ノコト復噴出シ地震鳴動スル雷ノ如ク硫黃

氣四塞シ爲ニ植物ノ生殖ヲ傷害セリ尋テ激烈緩慢常無シ大約二十年間ヲ經テ鎮滅シ爾來僅カニ蒸煙ノ騰散セルヲ見ル

ノミ其後明治三年ニ當リ噴出僅ニ四日間ニシテ已ム。

明治九年(1876)十二月ヨリ翌年二月ニ至ル噴火ハ、ナウマン、ミ

ルン和田氏一行ノ踏査ニ依リテ其噴出ノ狀況甚明瞭ニ遺憾ナク記載セラレタリ此噴火ハ唯三原火口内ニ變動アリシノミニ

テ激烈ナルモノニハ非ザリシナリ即チ明治九年十二月ニ(ナ

ウマンノ論文ニハ二年前トアレバ明治八年ナリ)横濱在留ノ

ビセツト(Barth)氏ガ登山セシトキニハ御洞ノ内全ク平坦ニシ

テ一ノ小孔ヨリ僅ニ蒸氣ノ昇騰スルヲ見タルノミナリシガ明

治十年一月二十日一行登山セシトキハ御洞ハ直徑十四五町

(ナウマンニヨレバ六百米即チ十一町トシミルンハ半哩トス)

ニシテ深サ三百尺餘(ナウマンハ百三十米トシミルンハ三百

呎トス)而シテ其中ノ西南位ニ當リ新ニ一噴火口(ミルンニヨ

レバ直徑五十呎許リ)ヲ生ジテ圓錐形ノ小山アリシガ二月九

日再度ノ登山ニハ新噴火口稍、其形ヲ大ニシ舊噴火口ノ巖壁

三分一ノ高サニ上リ最初實驗セシ所ニ比スレバ容積更ニ十倍

セルヲ覺ヘタリト云フ而シテ此噴火ハ二月六日ヲ以テ鎮滅セ

シモノ、如シ。次ニ此噴出ニ關スル記事ヲ集録セン蓋シ是等

ハ一ハ大島火山ノ現況ト比較スルニ重要ナル材料タルト同時ニ亦人ニヨリテ多少觀察ヲ異ニスベキヲ以テ煩ヲ厭ハズ之ヲ揭ゲン

次ニ掲グルハ泉津村ノ人小田井雄波氏ノ日記ニシテ信ズベキモノトシテ載セテ大島火山記ニアリ

明治九年十二月二十七日 午後三時地心ヨリ震蕩シ蒸煙騰

發シ夜間山上ニ火光映射スルヲ見ル

同二十八日 地震フ昨日ニ比スレバ慢シ其他前日ニ異ナラ

ズ

同二十九日 激烈ナル地震ス地裂ケテ數分トナル處アリ

明治十年一月四日 噴火再ビ發シ夜間映光ヲ望ム

同十三日 再ビ猛熾トナル

同十四日 微シク衰弱セリ

同十五日 再ビ猛烈トナル

同十六日 地大ニ震フ

同十七日十八日 甚ダ靜穩ナリ

同十九日 烈シク噴出シ火焰ヲ山巔ニ望ム

同二十日

同二十一日 大空紅ヲ帶ブ

同二十二日 同ジ

同二十三日 礮然聲噴火口ニ發シテ地震ス

同二十四日 同ジ

同二十五日 大空紅ヲ帶ブ

同二十六日二十七日 同ジ

同二十八日二十九日 靜止

同三十日 大空微シク紅ヲ帶ブ

同二月一日 山上ニ礮聲ヲ聞ク

同二日 靜穩

同三日 地震ヒ響烈シク火焰ヲ山巔ニ望ム

同四日五日 稍靜穩大空紅ヲ帶ブ降雨ニ因テ分明ナラズ

同六日七日八日 甚ダ靜穩噴火全ク滅熄セシナルベシ

次ニ大島火山記ニ載セタル大島火山實驗ノ記ヲ掲グ

大島火山實驗ノ記

一月二十日朝第六時三十分大島波浮港ニ到著シ直チニ上陸シテ登山ノ準備ヲ爲ス是ヨリ先キ海上ニ在ルノ日昏夜遙カニ該島山上ノ方重雲四塞ノ空際ニ當リ火光昇騰數十丈ノ上ニ紅映シテ宛然柱狀ヲ爲スヲ望メリ眞ニ奇觀ナリキ準備正ニ整ヒ道ヲ波浮港ノ西ナル山路ニ取り先ヅ山腹耕耘ノ畑ヲ經漸ク進ムニ從テ樹木鬱茂シ路幅狹隘ニシテ水潦兩水流注シテ溝ヲ爲

セル徑ヲ云フ)及ビ鎔石凝流ノ跡ニ非ザレバ二人竝ビ行ク事能ハズ密樹益々暢茂シテ人頭ヲ沒ス既ニシテ右折スレバ路甚ダ峻ナラザレドモ斜側シテ攀陟ニ勞スルヲ覺ユ此レヨリ路漸ク峻トナルニ隨テ火口ヨリ噴出セル所ノ細砂滿地ニ堆積シ往往大小ノ燒石ヲ混ズルヲ以テ歩行大ニ艱ム其際處々燒石ノ累積シテ胸壁ノ狀ヲ爲スモノヲ望ム尙ホ進行スル事數十歩ニシテ鎔石凝流ノ跡ヲ現ハセリ即チ疇昔鎔解シタル巖石噴火口ヨリ流出シ山腹ニ降テ凝固シタル者ナリ其質燒燬ニ係ルヲ以テ稍玻璃質ニ類スルヲ見ル但其表面ハ終年砂石ヲ混ズル水ヲ注瀉スルガ爲メニ磨洗セラレテ平滑砥ノ如シ山頂ヨリ雨水ヲ流通スル乾溝數十條アリテ皆同心線(即チ山峯ヲ圓心トス)ニ準テ下面ニ趨ク乃チ溝中ニ入テ兩邊斷壁ヲ檢スルニ皆高一丈餘ニ達シ疊々傾斜シテ層ヲ成シ即チ山腹ニ平行ス但シ稀ニ層位ノ變更ヲ現ハス處アリ。

却說其レヨリ二子山(地圖ヲ見ヨ)ニ達シ其麓ヲ迂回スル半ハニシテ一ノ深廣ナル谿谷ニ臨ム此谿谷ハ二子山ノ北方ニアリテ鎔石凝流ノ一大壑タリ更ニ攀登進行スル事息マズ時ニ滿天雲閉ヂテ陰々雨且サニ降ラントス既ニシテ一ノ巨大ナル岡阜ニ上ルニ及ビ白雲四集シ烟露重鎖シテ其山趾ノ廣谿モマサニ攀登セントスル最高ノ山嶺モ之レガ爲メニ蔽遮セラレテ咫尺

ヲ辨ズル事能ハザルニ至レリ此時噴火ノ響音遙カニ迅雷ノ耳ニ達スルガ如キヲ覺エタリ更ニ歩ヲ進ムル幾弓ナラズシテ又一大丘(低下ノ峯ナリ)ニ登ル是レ即チ威蘇威山^{フエズイフ}ノ「ソムマー」トモ云フベキ處ナリ茲ニ奇ナルハ恰モ此高處ニ於テ植物ノ化石ヲ發見セリ元來此種ノ化石ハチニフ中ニ在リテ多クハ木葉樹枝ノ形ノミヲ遺スモノナルニ獨リ本處ニ於テ見ル所ハ竝ニ其幹木モ存セリ但惜ムラクハ幹既ニ腐壞シ採掘シ難キヲ以テ假リニ其埋藏セザル所ニ就テ之ヲ計リシニ長サ一尺直徑四分餘アリキ因テ考フルニ其他處ヨリ來ルノ理由アルニアラザレバ此化石トナリタル樹木ハ必ズ該地ニ生殖セシニ疑ナシ蓋シ上古噴火セルノ際ニ方テハ樹木久シク此高所ニマデ蕃茂セシヲ證スルニ足ル此レヨリ稍斜メニ低平ナル地ヲ過ギ漸ク最高ノ山巔即チ現時噴火口ノ在ル所ニ登ルヲ得タリ初メ半腹ニ達セシ頃ハ大雨傾注シ暴風颺起シテ苦楚百端ナリシモ今山峯ニ立チ眼下ニ噴火口ヲ瞰シ其奇觀ヲ掬スルニ及ンデ疇昔履嶮ノ勞モ忘レ始メテ馬頭米囊花ノ懷アリ山巔ハ即チ舊時ノ噴火口趾ニシテ其中央ノ凹處ハ豁然トシテ深サ三百尺餘ニ達シ四圍屹然環峯ヲ爲シ直徑十四五町ニ餘レリ現時ノ噴火口ハ凹處ノ西南隅ニ在リ斷壁聳立スルヲ以テ坑底ニ降ル事能ハズ環峯上ニ立テハ斜メニ火口ヲ瞰ミ其噴火ノ狀近ク目睫ニ接スルヲ

覺ユ然レドモ坑中巖石鎔解ノ狀ニ至テハ之ヲ望ム甚ダ難シ因テ環峯ヲ一周シ百方其處ヲ索メシニ西北ノ方位ニ當テ噴火口ノ一邊斜メニ毀缺セルヲ見出セリ乃チ就テ其内狀ヲ覽觀スルニ鎔石沸騰ノ景狀宛モ湯水ニ異ナラズ炎々火光ヲ發シテ左觸右突シ其環壁ニ激シ空中ニ迸ルノ勢ハ百千ノ雷霆ノ如ク又火藥ヲ以テ巖石ヲ破碎スルガ如ク其響ノ激烈ナル亦他ニ相比スベキモノナシト云フベシ大約二秒時毎ニ轟然大鳴シテ鎔石ヲ噴投スル直立三百尺ノ高サニ達シ直下シテ復ビ噴火口ニ入ルモノ過半餘ハ口邊ニ留マル四五秒時間ヲ經テ迸裂スルモノハ其噴出殊ニ猛烈ニシテ往々大塊ヲ噴騰シテ千尺餘ノ高ニ達シ雲間ニ入テ其跡ヲ失スルニ至ル但斯ノ如キ衝天ノ大塊ニ至テハ再ビ降ルモ噴火口ニハ入ラズシテ其口邊或ハ凹所ニ墜留マルヲ多シトス又噴火口中鎔石ノ表面ヲ望ムニ數々一大泡ヲ生ジテ燦爛光輝ヲ發シ一二秒時間ヲ經泡面破裂スルニ及ビ片々四方ニ飛散シ奇偉云フ可カラズ蓋シ泡中水蒸氣ヲ含蓄スルニ由テ此徵ヲ現ハスモノナルベシ加之噴火口壁モ往々其激勢ニ壞崩セラレテ漸次坑中ニ入り殆ンド全小山ノ鎔解スルカト疑ハル又噴火口ニ接近セル西南ノ壁間ヨリ偶々水蒸氣ノ騰發スルヲ望メリ又凹底ヨリ(噴火口ヨリ稍遠キ處)忽然綠黃煙ノ昇騰スルヲ見タリ想フニ是レ硫蒸氣ナラン此他硫黃蒸氣ノ噴

出スルモノ極メテ稀ナリ初メ我輩ノ山峯ニ達スル頃ホヒ風雨強盛ニシテ殆ンド咫尺ヲ辨ズル能ハザリシガ時移ルニ從テ益々暴烈トナリ風ハ燒砂ヲ飛散シ雨ハ霰ヲ混ジ衣服盡ク濕ヒ滴々地ヲ浸シ困難實ニ名狀スベカラザルニ至レリ是ニ於テ山ヲ降り道ヲ東南ノ海濱ニ取り正ニ波浮港ニ歸著スルニ及ベリ固ヨリ此風雨ハ天氣ノ然ラシムル所ニシテ火山ノ噴出其原因タルニアラズト雖モ其霰ハ火山空氣ノ熱度異ナルニ因リテ生ゼシモノナルベシ蓋シ其唯山峯ニノミ降りシヲ以テ之ヲ證スベシトス「大島火山ハ之ヲ外國ノ火山ニ比スルニ其噴火ノ狀宛モ地中海ニ在ルストロムボリー火山ニ類似ス但ストロムボリーハ間斷ナク噴火スト雖モ大約十五分時毎ニ噴火スルノミニテ大島ノ如ク頻々甚ダシキニ至ラズ史ニ徵スルニ凡ソ火山ノ久シク噴出(假ヒ小噴火ハ斷エザルニモセヨ)セザル者ハ必ズ一時ニ激烈ナル噴騰ヲ起スモノナリ因テ考フレバ大島火山ノ如キモ他日或ハ更ニ激烈ナル噴出ナキヲ期ス可カラズ而シテ其噴出ニ際シ鎔石ノ噴火口中ニ凝溢スルモノハ其時道ヲ覓メテ必ズ山麓ヘ流出スルニ至ルベキヲ想察スベシト雖モ後來果シテ此徵ヲ發スルニ方リ其鎔石ハ且サニ噴火口ノ何處ヨリ流出スベキヤ是レ豫メ定ムベカラズ蓋シ此レ其石質ノ如何ニ關スル事ニテ即チ必ズ石質ノ緩結セル所(容易ク破壊シ得レバ

ナリ)ニ道ヲ取ルベシ而シテ大島現時ノ噴火口邊ハ其北方最も低クシテ且ツ石質モ緩慢ナルガ如クナレバ意フニ道ヲ此ニ求ムルモ未ダ計ル可カラザルナリ「既ニ前ニモ言フガ如ク吾輩第二回ノ登山ノ時噴火ハ全ク停歇セシ如クナリシヲ以テ現ニ其狀ヲ目撃スルヲ得ザリシト雖モ是レ全ク其漸滅セシニ非ズ即チ唯噴火ノ稀ニ發シテ且ツ微ナルノミ土人ノ言ニ據レバ現ニ尙ホ(即チ二月十二日頃)日々午時ニ一回噴出スト云フ但未ダ全ク信ズルニ足ラズ二月十二日午前九時三十分差木地村及佐野濱ノ中間ニ杖ヲ引キシ時山上ニ白煙ノ昇騰スルヲ望ミ更ニ山腹ニ到ルニ及ンデ白煙ト共ニ其鳴響ヲ聞ケリ然レドモ山峯ニ達スルノ後ハ更ニ復タ噴出ノ徵ヲ見ザリキ抑噴火ノ一月二十日來殊ニ熾盛ナリシ事ハ火口ノ四邊ニ燒石ノ大塊數十ヲ存スルヲ以テ之ヲ徵スルニ足ル蓋シ吾輩初度登攀ノ時ハ其大塊僅カニ一ヲ見シノミナレバ此他ハ皆一月二十日來ニ噴騰セシモノナルベシ而シテ其狀ニ就テ考フルニ此等ノ數塊ハ當時殊ニ廻カニ高ク噴投セラレシ者タルヲ覺ユ且ツ聞ク所ニ據レバ泉津村竝ニ其他所々ニ於テ一月二十三日以來二月四日迄夜間屢々火焰ノ昇騰スルヲ望メリト云フ是レ復タ以テ其熾盛ナリシヲ證スベキナリ又噴火口ノ北即チ噴火口峯最低ノ處ニ於テ地面少シク迸裂シ宛モ一小渠ヲ成スヲ見タリ。

明治十年以後三原山ニ昇リシ記事アルハ次ノモノニシテ明治二十年(1887)四月ノコトニ係ル

伊豆島巡視日誌

今回ノ一行中ナル農學士高木玉太郎氏ガ語レルヲ聞クニ氏ハ昨十六日(明治二十年四月)ヲ以テ上リケルガ天晴レ氣澄ミテ火坑ノ口マデ抵ルコトヲ得シガ其狀四方高ク中陷リテ盆ノ如クナル其盆底ニ更ニ一坑アリ煙坑中ヨリ立チ昇ルヲ以テ近クハ視ヒ得ザレドモ坑内極メテ深ク石片ヲ投シタルモ其響ヲ聞カズ煙ハ固ヨリ硫氣ヲ帶ビタレドカノ咽ヒテ血ヲ咯クガ如キ甚シキコトハナシト云ヘリ。

明治十年噴火以後大島ヲ詳細ニ踏査セシハ山崎氏ニシテ其報告ハ前述ノ如ク本會記事第九號ニアリ今其中ヨリ噴出ノ有様ヲ記述セル部分ヲ拔萃センニ大略左ノ如シ。

中央火口丘三原山ハ恰モ舊火口(外輪山ノコト)ノ中心ニ於テ噴起セリ其噴出物ノ量未ダ高峻ナル峯ヲ造ルノ多キニ至ラズ各種ノ噴出物相堆積シ火口原ヲ拔クコト平均百米餘其外部山腹ハ頂邊ニ於テ二十八度中腹ニ於テ十八度前後ノ傾斜ヲ爲シ内部ハ即チ懸崖直立爰ニ一大噴火口ヲ造レリ噴口ハ正圓形ヲ爲シ直徑七百五十米(八町餘)ニ及ブ其形狀甚ダ信濃淺間山ノ噴口ニ類肖シ而シテ其大サニ至リテハ彼ノ直

徑二倍以上ニ當レリ噴口内部ハ噴汽ノ絶間ニ十分能ク觀察スルヲ得ベシ噴口壁ノ上部ハ四方直立スルモ其頂上ヨリ降ルコト平均百七十米前後ニシテ中段アリ又火口ノ中心ヨリ西南ニ偏倚シテ小丘アリ圓錐形ヲナシ其北方半面ヲ缺クナウマン氏ノ記事ニヨレバ此小丘ハ明治九十年ノ噴出ニヨリテ成リシ者ニシテ其描キタル圖畫ヲ見ルニ噴出ノ當時ニアリテハ此新小火口丘ヨリ盛ニ熱灼セル鎔岩片ヲ噴出シ一道ノ火柱ヲナシテ昇騰セルノ狀ヲ示セルモ今日ニアリテハ絶テ此等ノ狀アルヲ見ズ又當時ニアリテハ今日ノ中段ト稱スルモノ其火口底ニシテ彼ノ小丘ハ即チ之ヲ破テ噴出セル鎔岩ノ堆積セシモノニ外ナラザルナリ今日ニ於テハ噴口ノ中心ニ當リ中段ヨリ更ニ深ク斷崖ヲ爲シテ窪ミタル部分アリ其最底部ニ當リ又圓形ヲ爲セル井狀ノ者ヲ見ル是レ即チ地下ノ熾熱帶ニ通ズル道路ニシテ血紅色ヲ呈セル鎔岩ハ此所ニ其頭ヲ露ハセリ(ナウマンノ記事ヲ引用セル部分、中略)今日ニ在テハ復ビ此壯觀(ナウマンノ時ノ如キ)ヲ見ルコト能ハズト雖モ遙ニ噴口ノ底部ヲ窺フニ其熾熱紅色ヲ呈セル部分ハ時々明暗其度ヲ異ニシ光ニ消長アリ下部ニ位スル所ハ假令其光微弱ナルモ猶常ニ紅色ヲ失ハザルモ其上部ニアリテ時ニ全ク其色ヲ見ザルコトアリ其勢稍盛ナル時ニ當

リテハ高ク光焰ヲ舉ゲ井狀噴口ノ外ニ騰ラシムルコトアリ
此光焰ハ彼ノ鎔岩ノ水蒸氣ニ反映スルモノニ非ズシテ想フ
ニ或ル瓦斯體ノ燃燒シテ火焰ヲナセルモノナルベシ何トナ
レバ此火焰ノ昇ルニ先タチ其上部ニ反映スベキ水蒸氣ノア
ルコトナク却テ此火焰燼滅セバ忽チ稍々蒼黃色ヲ帶ベル白
氣トナリ昇散スルヲ見ルヲ以テナリ鎔岩ノ明暗火焰ヲ起ス
ノ時間ハ定マルコトナク十二月三十日觀察セシ時ハ一月一
日登臨セシトキヨリモ其熾ナルヲ覺エタリ今日ニ至ルモ時
ニ夜間山上ノ汽柱ニ紅映ヲ見ルハ其最モ勢ヲ逞クスルトキ
ナルベシ噴口ノ内外所々ヨリ水蒸氣其他ノ瓦斯ヲ噴出ス瓦
斯ノ主要ナルモノヲ硫化水素、亞硫酸瓦斯トス風下ニ立ッ
トキハ往々其臭氣ニ堪ヘザルコトアリ其最多ク噴出スル所
ハ中段ノ下部井狀噴口ノ上部ナリ硫化水素ト亞硫酸瓦斯ト
ノ抱合ニヨリテ分離セル硫黃ハ著ク此斷崖ニ付著シテ淡黃
色ヲ呈セリ此等ノ瓦斯ハ又小火口丘ノ側面ヨリモ噴出シ火
口壁面到所ヨリ噴出シ又頂上ノ地表ニ小孔ヲ造リテ逸出ス
ルモノアリ彼ノ團々綿ノ如ク雲ノ如ク昇騰スル汽煙ハ此所
彼所ヨリ縷ノ如ク噴出スルモノ相集マリテ成レルモノニ外
ナラズ汽煙ノ昇ルヤ又時ヲ定メズ乍チニシテ大ニ起リ乍チ
ニシテ霧散シ永續スルコトアリ長ク中絶スルコトアリ其原

因ヤ必ズシモノナラザルガ如シ。

附錄 三色版大島地圖ニ就テ

本圖ハ大島元村役場ニ於テ得タル古圖中ノ一ヲ縮出セルモ
ノナリ。製圖ノ年代不明ナレドモ安永ノ噴火ニ伴フ鎔岩流
ノ所在ヲ示スコト明ナリ。圖ハ元村(舊稱新島村)方面ヨリ見
タル三原山ヲ中心トシテ畫ケルモノニシテ三原山巔ヨリハ
火炎ヲ出シ山腹ノ鎔岩流中ヨリハ水蒸氣ノ噴出ヲ示スモノ
ト覺シキ白炎ヲ畫キタル又鎔岩流ガ二分シテ島居ノアル所
ニ一ノ島ヲ殘シタルヲ示ス等注目ニ價ス。又鎔岩流ノ兩側
ノ樹木ノ燒枯レヲ示シタリ。

大嶋(安永)噴火地圖説明

A 元村(舊稱新嶋村) 元村及び岡田村のみが漁船を所有する權利を有せしにより本圖には此兩村の濱

B 岡田村 邊に船を蓄きしものならん。

C 泉津村

D 野増村

E 差木地村

F 波浮港 此港は上總人の開きしものなれば同國の漁船の多く碇泊する所を示せしものか。

G 三原山中央火口丘

H サノ濱 本嶋に稀に見る砂濱なり。

I 波治釜神社(式内神社)の所在地社殿今に在り。本文第四八頁の藥地釜とあるもの蓋し此地點ならん。

L 本文安永七年の噴火中の澤の鎔岩流に相當す。

M 同上赤澤の鎔岩流に相當す。

K 同上ゴミ澤の鎔岩流に相當す。

N 役行者の岩窟。泉津村民の口碑によれば行者窟の手前は昔しの噴火にて海に突出し居たりしが漸々崩れて今日は海岸却て凹になれりと云ふ。

P シカマの瀧所在地。一の絶壁を爲す地點にして豪雨の時は瀧を爲す。本文第四七頁天和四年の噴火の小釜瀧は是れか。尙差木地村の海岸に噴火の時に海中に押出せしと傳へらるゝ地點あり。



